

資 料



**大学間連携共同教育推進事業
米国先進事例調査報告書**

訪問期間： 2012年11月4日～11月10日

訪問先： ジョージア大学 (GU)・高等教育研究所 (IHE)、ワバッシュ大学、
Indiana University-Purdue University Indianapolis (IUPUI)

訪問者： ・関西国際大学 山本秀樹、笠原千絵
・淑徳大学 矢尾板俊平
・くらしき作陽大学 田村周一
・北陸学院大学 富岡和久

ジョージア大学 (UGA)

【大学の概要】

- ・ 425名以上の学生が海外研修プログラムを利用。
- ・ 17の教育機関で構成され、76のプログラムを約34,800人の学部生と、約9,000人の院生に提供している。
- ・ 国際交流は第二次世界大戦に始まり、1990年代から2000年代に掛けて大きく発展した。
- ・ 約100のプログラムが提供されており、学生の平均70～80%の学生が海外で学んでいる。
- ・ 50を超える交換留学提携校がある。

【調査日】 2012年11月5日

Q：グローバルスタディの評価において重要な事は何ですか？

プログラムの目標設定：

- ・ プロセス/アウトカム評価双方からの観点
- ・ 組織的な評価体制をプログラムに組み入れる。最初に測定可能なゴール、目的を設定し、評価結果を使って質の改善をするということ。

Q：学外プログラムに適した目標とはなんですか？

ジェネリックな内容か？ アカデミックな内容か？

- ・ 学年の制限がないこと、多様な学生のニーズを想定すると、学外プログラムの難易度は一般的なもの。アカデミックな内容より、ジェネリックな内容の方が良い。
学部・学科ごとのテーマ設定もある。比較の継続可能性から考えると、よりジェネリックなもの、大学の目標などから設定。
- ・ 教員の申請によるプログラム実施の場合でも、そもそも大学の組織目標に合致しないものは認められない。

Q:期待される学修成果 とその他の効果の例は？

- ・ 例) Student satisfaction, Value for cost paid, Intercultural sensitivity, Personal maturity & development, Knowledge acquired about host country, Enhanced disciplinary knowledge, Liberal education life skills
- ・ Self-efficacy, Emotional Resilience ,Intellectual perspective, Global/Environmental citizenship,

Global mindedness, Intercultural sensitivity/cultural relativism

(以上,Dr. Rubinによる)

Q : 学修成果の組織的評価におけるプログラムの評価者は？

◇部局の場合

- ・ 担当部局ごとに数ページにまとめた報告書。

◇担当教員の場合

- ・ 部局は学生派遣で忙しく、全体的な分析はできていない。学科プログラムは担当教員がアセスメントするも、教員間で方法の統一は難しい。
- ・ Assessment Officeの分析担当者(データ収集、ファシリテーション)と教員(結果の評価、解釈)の役割分担。

◇+コミッティーの場合

- 海外プログラムはやりたい教員による「申請」方式。
- 効果の観点から継続の可否を決める。

Q : 学修成果の評価方法 : 概要

◇多元的な評価方法の併用

例) 量的データ

- ・ 入学時の基礎データ、統一テスト
- ・ 就職率、給与等(大学力的なもの)
- ・ サンプルング/全数

※1年次と4年次に測定しやすい

例) 質的データ

- ・ 学外活動の成果、学習プロセス
- ・ ルーブリック、ポートフォリオ、フォーカスグループ等の活用

※測定しづらい2、3年次の状況

【資料】 Hansen, Huerta and Larsen(2012) Learning Community Assessment Pre-Conference Workshop, 17th Annual National Learning Communities Conference

※LCに焦点化したタイトルだが、内容はアセスメント方法の一般論。

Q : 海外プログラムの評価

◇Global Perspective Inventory

- ・ 個々の学生の評価ではなく、全体としてのゴール達成度を測定。
- ・ 学生の考え方、自文化や他文化と関連させた視点、背景、価値などを測定。

◇GLOSSARI : Georgia Learning Outcomes of Students Studying Abroad Research Initiative

- ・ フェイズ1 : study abroad (SA) 参加者と非参加者のラーニングアウトカム分析
- ・ フェイズ2 : 複数の手法を用いて、ラーニングアウトカムについてのSA参加前と後の分析
- ・ フェイズ3 : 同一内容のコースを海外で実施した場合と国内で実施した場合の比較分析
- ・ フェイズ4 : SA参加者と非参加者の学業成績の比較分析
- ・ フェイズ5 : 違いを生み出すプログラムデザインの特徴についての分析

【資料】

- ・ Bolen, M. C. ed(2007) A Guide to Outcomes Assessment in Education Abroad
- ・ Sutton, Miller and Rubin(2007) Research Design in Assessing Learning Outcomes of Education Abroad Programs (上記本の第2章)

ワバッシュ大学

【大学の概要】

- ・ 学生数：900人。7割がインディアナ出身。
- ・ 全米で3つしかない、男子リベラルアーツ校。
- ・ 教員のTeaching より、学生のLearning を重視する。
- ・ 6-7割が大学院に進学。
- ・ 学生は特に裕福というわけではない。したがって奨学金が重要。奨学金があれば、夏期休暇中にアルバイトに時間をとられずに、プログラムに参加できる。

(例：Summer Immersion Program)

【調査日】 2012年11月6、7日

【Higher Education Data Sharing Consortium (HEDS)】

Q：HEDSの設立目的は何ですか？

- ・ HEDSでは、学生個人のデータを使ったStudent Learning に特化したIRを行っている。

Q：どのような事業を行っていますか？

- ・ 独自の質問紙を作ってWabash National Study of Liberal Arts Educationを実施している。
- ・ 調査の結果をコンソーシアム会員大学にフィードバックする。
- ・ 学生や教員に対する1対1の面接調査（定性調査）も行う。
- ・ 本音を聞くために学部生に対して学生がインタビューする調査、Follow Upリサーチがある。
- ・ Pre（入学時）、Post 1（9か月後）、Post 2（卒業時）の3回実施。
- ・ 授業中のこと、授業外のこと、何をしたか、どのようにしたか、学修時間は、等々。
- ・ National Survey of Student Engagement（NSSE）に近い独自の調査票。
- ・ 学生を成長させる経験の特徴をつかむ。

Q：データは大学間で共有しますか？

- ・ コンソーシアム間ではデータは共有しあう。大学名はオープンにする。自大学の弱いところについては情報提供しあい互いにサポートする。
- ・ データはコンソーシアム外には出さない。

Q：データはどのように利用しますか？

- ・ 量的なデータだけを見てはだめである。
- ・ それぞれのキャンパスに行って、定性的にデータを掘り下げ（データマイニングを行い）、プログラム改善のためにはどのような変更が必要かを探る。
- ・ ここまでやっている例は米国でもない。

Q：コンソーシアム設立の目的は？

- ・ コンソーシアムは小規模な大学を良くして行こうとする目的のもとに作られた。
- ・ 最初はこのような独自の調査をやるインフラはなく、NSSEをやっていた程度である。

Q：ルーブリックはどのように使いますか？

- ・ ルーブリックは量的評価のためだけでなく、FDのためにも使っている。
- ・ 教員は量的評価が嫌いな場合があるので要注意。
- ・ たとえばSAのアセスメントにおいて、満足度調査、NSSE等の調査は簡単であるが、ルーブリックで

の評価は簡単ではない。

しかしルーブリックは非常に役立つツールである。

- ・ Center of Inquiryオフィスではスタンダードのルーブリックはない。VALUE ルーブリックをそれぞれの所に合わせ、“チューニング”して使っている。

Q：eポートフォリオはどのように使っていますか？

- ・ eポートフォリオも量が多くて評価においては大変である。そのため一部分だけをサンプリングして評価するという問題が発生している。
- ・ eポートフォリオのテンプレートはない。
- ・ Center of InquiryではEポートフォリオの使い方、データの収集の仕方、分析の仕方（変化の見方）のサポート等、コンサルタント的な業務をしている。

Q：アセスメントはどのようにしていますか？

- ・ コンソーシアムの大学ではそれぞれのやり方でアセスメントを行っている。
たとえば、CLS (Collegiate Learning Assessment) は30大学が使用、ルーブリックを10大学がNSSEを40大学がそれぞれ使用している。

Q：コンソーシアムで行っている他の事業を教えてください。

コンソーシアムの大学に対してWorkshopを行っている。内容は以下のとおり。

- ・ Workshop1（3月21日～23日）：
FD。アセスメントエビデンスの使い方について。
 - 教員をサポートしたりdevelop したりするためのプログラムをどのように作るか。
 - アセスメントエビデンスをSA にどのようにあてはめるか。
 - アセスメントエビデンスをLearning Community にどのようにあてはめるか等
 - 来年度行うものをチームで決めて、それを各大学のアカデミックリードに持ち帰る。
 - データプロセスというよりはFaculty が何をするのかのチョイスを決定する。
- ・ Workshop2（4月18日～20日）：
卒業生からのアセスメントデータの使い方。卒業生からの追加のデータを使ってプログラムを改良すること。

【海外研修プログラムについて】

Q：immersion tripの運用について

Immersion Learning (trip/course)は

- ・ 海外での集中的な体験をとおして視野を広げる。
- ・ 発展的にアカデミックな学びにつなげていく。
- ・ プログラムの立案は教員が行い、コミッティーが審査。
- ・ 3年生の15～20%が参加し、参加希望者の内80%は渡航経験のある学生。
- ・ 学生の費用負担は食事のみで各種の奨学金を活用。
- ・ 活動内容はブログで公開（保護者へのエビデンス）。

（参考）<http://blogs.wabash.edu/immersionlearning/>

Q：Study Abroad の行先例を教えてください。

- ・ 自国→Wabash→南米 のようなケースもある。
- ・ IES (International Education of Students) を通じて、他大学のプログラムを使うこともある。

- ・ International Studies & OFF-Campus Studiesのオフィスでは、留学プログラムの質コントロールを業務の1つとしている。

Q : immersion tripのプログラム例

- ・ New York - Art
- ・ Italy - St. Francis of Assisi
- ・ Belgium/Germany - Politics/Economics of the European Union
- ・ Spain - The Baroque Era
- ・ Belize - Invertebrate Biology
- ・ Indiana - Marketing
- ・ Southern U.S - Expressive Culture

Q : プログラムにおいて大事な条件は何ですか？

- ・ 単位が取れることが大事な条件である。(3 credits ～4 credits)
- ・ 応募者の中から選ばれるためには、成績が良いこと、2人の教授からの推薦があることや、レポート、卒業までのGraduation Plan の提出が必要。
- ・ プログラムの費用は奨学金やローンを使う。

Q:海外プログラム実施における効果的な指導方法

◇効果的な指導方法：プログラム担当者の役割としての「事前」「期中」「事後」に集中的に関わることに
よって効果的な指導が可能になる。

- ・ 現地の専門職による講義
授業との共通点を再確認させる。
- ・ 歴史的モニュメントを前にプレゼンテーションをする。
事前に準備してきた内容の妥当性を検証できる機会となる。
- ・ レポート・研究の指導
事前に研究計画を立てる。
現地でそれら可能性を検討する。
帰国後に研究計画を修正しレポートを作成する。
- ・ 例：イタリアのプログラム「美術や考古学をローマで学ぶ」
歴史的モニュメントを前にしたプレゼンテーション。

事前学習で入念に準備をしても実際にはうまくいかないこともある。

失敗しないように教える（teaching）ではなく、失敗から学ぶ（learning）ことも重要。意味のある失敗から、自律的な学習を促す。

◇効果的な指導方法：

- ・ 科目に関連付けられたプログラムの利点
授業でそれらトピックを活用することが可能。
特定の科目に対応しないものもある（インターンシップ等）。
- ・ 科目間連携
政治や経済をEUで学ぶには「政治」「経済」の両科目が必修。
スペイン語や古典（文学）をバレンシアで学ぶ。

Q : 多様なプログラムの提供方法

◇発展的に海外体験（留学等）を進める上で外部のプログラムを使うこともある

- ・ 担当部局（International studies & OFF-Campus Studies）がプログラムの質を管理。
- ・ 1学期以上のスタディアブロード（毎回30～40名が参加）。

Q：プログラム参加の審査要件

1. 卒業までの履修計画
 2. 参加動機
 3. 教員2名以上の推薦書
- ・ プログラムの質は担当部局が管理

（参考）<http://www.wabash.edu/international/welcome>

Q：Study Abroadの効果測定はどのようにしていますか？

- ・ 通常、リベラルアーツのプログラムと、インターンシップやSA等の教室外プログラムは同時に分析しない。
- ・ 教員は自分のプログラムは正しいと考えているため、特に効果測定はしていない。
- ・ SAについては実態調査や満足度調査はするがFormativeな Assessment や学生の評価はしていない。
- ・ SA、インターンシップ等のアセスメントについては、その該当する部署の責任者に任されている。
- ・ General Educationのアセスメントについても同様である。教員は統合（インテグレート）されることはあまり好まない。
- ・ 学生個人について細かく分析を行っているが、プログラムのデザインが多種であり、変数が多すぎることから、量的データや、より洗練された調査手法を使っても分析はうまくできていない。
- ・ 学生個人の評価において、ループリックの効果的な使い方は、事前と事後の比較分析である。
- ・ 学生自身に（伸び具合を）具体的にデータで示すことが重要である。

Q：個々のプログラム（SA、SL、インターンシップ等）について、そのプログラムが学生にとって効果があつたかなかつたかのアセスメントはどうしていますか？

- ・ 特に決まったやり方はない。プログラムごと、担当者ごと、別々にやっている。
- ・ また、学生に対する評価の結果のフィードバックについては、テンプレート等、特に決まったもの、決まったやり方はない。

Q：コンソーシアムの大学間でSAのアセスメントについて決まったものはありますか？

- ・ 特に決まったものはありません。
- ・ SAのアセスメントはむずかしい。
- ・ SAでは異文化体験、言語のちがいがいろいろあるが、コンピテンシーについてアセスする良い方法はない。
- ・

Q：その他特徴的なプログラムはありますか？

- ・ アカデミックな学びを海外で行うImmersion コースというのがある。
（例：ローマ美術や考古学をローマで10日間学ぶ。）
- ・ 最初に教員がプログラムの内容、期間、コスト等を記載してコミッティーに提出する。
- ・ 承認が得られれば学生を募集する。
- ・ 学生に対して事前に行うべき課題も課される。
- ・ このプログラムはコンソーシアムの大学間で統一されたものではない。
- ・ 教員も一緒に行動することでその後の授業にも役立つ。
- ・ 3年生の15～20%は参加する。食事代以外は大学が負担する。

Q：複数の科目で連携してプログラムを実施することはありますか？

- ・ 他の教員と連携してのプログラムについては、たとえば、政治学と経済学の教員の興味が一致して2つの科目が連携されたプログラムができることがあった。
- ・ 1科目のプログラムと複数プログラムのどちらがよいかという前に、まずは教員の興味が一致することが必要である。

Q：アセスメントはどのように行っていますか？

- ・ このプログラムのアセスメントについては現在検討中である。
- ・ 中には、科目に対応しないImmersion コースもある。(例：インターンシップ)

Q：課題は何ですか？

- ・ 旅行経験のある学生に対してSA をいかにしてImmersion体験につなげられるかという点である。多様性のある体験をすることが学生の変容につながると考えている。
- ・ 出発前の事前準備が大切である。

Q：参加の可否はどのようにして決めますか？

- ・ Immersion コースに参加希望の学生に対しては、フォーマルなプロセスではないが、このプログラムが学生に合っているかどうかについて、教員の過去の経験をもとに学生一人ひとり申込書をチェックする。最終的には学科長が決定する。

Q：アセスメントはどのようにしていますか？

- ・ Immersion コースのアセスメントについては、現地で2回のプレゼンテーション、事前、事後の2回のレポートの提出、毎年定期的に行われるプレゼンテーションへの参加がある。

Q：アセスメントにルーブリックは使っていますか？

- ・ ルーブリックは使っていない。理由としてはImmersion コースは効果があると思えるし、また、ルーブリックでは測定しにくいと考えるから。

Q：特徴的なアセスメントはありますか？

- ・ コース終了後には学生に対しては以下のような質問をしているが、これらも効果的なアセスメントの手段である。
- ・ 質問項目：
 - 異文化、海外でのコミュニケーションに自信はついたか。
 - 何が自身を成長させたか。
 - 障害は何であったか、etc.

Q：海外プログラムの経験は学生に良い影響を与えていますか？

- ・ NSSEのデータを見る限りは、海外体験をする、しないで、学生のCritical Thinking やReasoning等の結果に差はない。
- ・ 授業の評価と異なり、SA はコントロールできない条件が多いのでアセスメントはむずかしい。
- ・ SA参加者の8割に海外経験あり。
- ・ 海外未経験の学生は問いをたてる重要性を学ぶ。

Q：事前の学習で効果があった内容は何ですか？

学生がプログラムを選択する際、“このコースをとればどのような変容が自身に起こると考えるか”、“ど

のようなベネフィットがあるか”を考えさせることが学生に変容を起こす上で効果があることがわかった。

Indiana University-Purdue University Indianapolis (IUPUI)

【大学の概要】

- ・インディアナ州立大学である文系のインディアナ大学と理系のパデュー大学（理系）の包括的な総合研究大学。
- ・インディアナポリスのビジネスや文化、教育的な団体と強く結びついており、学生は街中でのインターンシップやサービスラーニングをとおして、教育的な経験を広げている。
- ・学生の年齢は比較的高め。
- ・パートタイム学生が多い。
- ・First generationの学生が多い。
- ・GSができる可能性をもつ学生は少ない。

【調査日】 2012年11月8日

Q：国内にいながら海外へアクセスできるプログラムの例？

◇Virtual study abroad

- ・ 2005年からVSAの取組を開始。
- ・ 費用負担の問題から海外プログラムに参加できない学生にも大きなメリットがある。
- ・ IUPUIはVSAのパイオニア。
 - 協定校と連携して実施する擬似留学体験プログラム
 - インドネシアやパレスチナ等のプログラム
 - アメリカ国内にある外国人コミュニティや外国人支援NPO組織、移民局等での活動

◇プログラム例

International Studies & a Gaza Case Study

- ・ ガザ大学との共同プログラム（相互に16名の学生）でホストファミリーも設定。
- ・ SkypeやFacebookを用いて学生間やホストファミリーとの交流を継続。
- ・ モスク等の宗教施設等も訪問しコミュニティでの食事や振る舞い、しきたり等を学ぶ。
- ・ 成果はYouTubeにアップロード。
- ・ 課題は時差と言語。

（参考）<http://homepages.indiana.edu/web/page/normal/21510.html>

International Studies & a Gaza Case Study

Q：学修成果の組織的評価方法は？

◇各部署の位置づけや目的を、達成すべき学修成果との関連から明確化。

【資料】

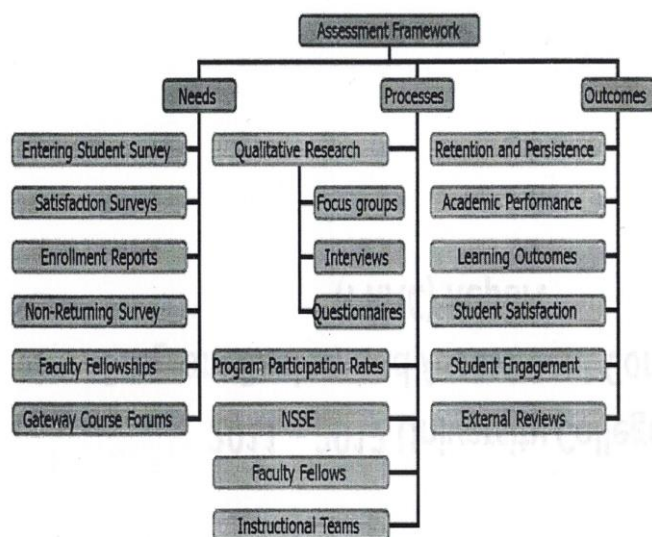
- ・ Guidelines for Academic Program Review at IUPUI
- ・ Guidelines for Program Review For Service Units at IUPUI

◇部局ごとに年次レポートを作成

- ・ 1ページの要約版からフルレポートまで
- ・ 予算獲得のための効果証明
- ・ 学修成果の評価≠成績評価

Q : 学修成果の組織的評価の例を教えてください。

◇例)University College Program Review and Assessment Committee(図)



- ・ 多様なプログラムが、とりわけ初年次に効果をあげるための慎重なアセスメント戦略。
- ・ ニーズ/プロセス/アウトカムのアセスメント。
- ・ 質/量、直接/間接。
- ・ リスク学生の特徴を明確化。
- ・ 各プログラムの目標、アセスメント結果、結果に基づく改善点を1ページ程度にまとめる。
- ・ 評価対象：奨学金、マイノリティ学生支援のセンター、キャリアサービス、学習支援センター、メンター、初年次プログラム等

Q : 学修成果の組織的評価例

・ IUPUI, University College Program Review and Assessment Committee Report

学習支援センターピアメンターの評価例

Program	Goals and Student Learning Outcomes	Assessment Findings Highlights	Changes Made Based on Assessment
Bepko Learning Center Peer Mentoring	Program Description - The mission of the Bepko Learning Center is to enhance the opportunities for undergraduate students to achieve educational goals and to assist in their development of academic skills through the guidance of more experienced, highly successful student peers. Collaborative learning, role modeling, peer interaction and peer support play key parts in this process. To assist students in realizing their full academic potential, the Bepko Learning Center houses three offices: the Office of Academic Mentoring, the Office of Tutorial Support and the Office of Academic Enrichment. Program Goals - To offer academic support in a variety of subjects in order to improve educational achievement. - To assist students in maximizing his or her full academic potential at each stage throughout the undergraduate experience. - To facilitate appropriate referrals to other campus resources - To provide support systems to enhance academic success - To help resolve the problems that caused the student to seek help and to work towards making the student a more independent learner.	- Students who participated in the Structured Learning Assistance program 1-10 times obtained an average GPA of 2.05, 11-13 times obtained a 2.74 and 14 or more times obtained 2.98 - Student who participated in the Supplemental Instruction program obtained an average GPA of 3.05 and non-participants obtained an average of a 2.46. - Student who participated in the Supplemental Instruction program had a combined DFW rate of 11.32% as compared to a 31.64% for non-participants. Methods used to assess student learning and success: - End of the Semester Evaluations - Mentor Self Evaluations - Grade Report (comparing participants to non-participants) - Program Participant Attendance - Instructor Evaluations - Program Evaluations - FLAGS Report	Based on the assessment results for programs, the following are future changes that will be implemented: - Increased marketing efforts for the Tutor Matching Service to make students aware of the new tutoring application. - Increase the number of partnerships with gateway courses to augment academic supports for those courses. - Further increase the email outreach used for students who have been flagged as "at-risk" by the new FLAGS system and follow with instructors to communicate referral activities.

Q：学修成果の組織的評価におけるプログラムの評価者は？

◇部局の場合

- ・ 担当部局ごとに数ページにまとめた報告書がある→効果的！

◇担当教員の場合

- ・ センター専任教員(or専門職員)の存在。

◇+ コミッティーの場合

- ・ プログラムは学科の担当教員がアセスメントし、部局スタッフは行わない。最終的にはコミッティーがプログラムを継続するかどうかを決定。

Q：インターンシップの評価はどのようにするのか？

◇Student evaluation

- ・ 自己ふりかえり(例：何を学んだ？他の学生に勧めるかどうか？理由は？等)。
- ・ キャリアサービスへのフィードバック。

◇Employer evaluation

- ・ 専門性の獲得、発達の観点から→学生へ。
- ・ カリキュラムおよび準備の観点から→スタッフを経て教員へ(例：学習内容、履修科目等)。

Q：サービスラーニングの評価はどのようにするのか？

- ・ アカデミックラーニングの証明ではなく、活動の目標に沿った評価。
- ・ 途中段階でのリフレクションはサービスラーニングのアセスメントにもつながる。
例)得たこと、学んだこと、習得したスキルは何か？よかったこと、チャレンジングだったことは？
→学びの描写。Facebookやブログの活用。
- ・ アセスメントの方法：調査（サーベイ）、短いレポートとルーブリックによる評価、学生の成績、地域活動に費やした総時間数など。
- ・ e-portfolio：項目はTeaching & Learning, Self-presentation/

Identity development, Accountability and Assessment

→プログラム（授業、コース、学科...）ごとに評価項目の表が画面に示される

guided reflection

【資料】Ash and Clayton(2009)Learning Through Critical Reflection: A Tutorial for SL Student(Instructor Version)

**大学間連携共同教育推進事業
米国先進事例調査報告書**

訪問期間： 2013年2月3日～2月10日

訪問先： 米国カレッジ・大学協会（AAC&U）、ケンタッキー州中等教育後評議会、カリフォルニア州立大学フルトン校（CSUF）

訪問者： ・ 関西国際大学 吉田武大
・ 淑徳大学 矢尾板俊平
・ くらしき作陽大学 田村周一、芝崎良典
・ 北陸学院大学 富岡和久

訪問目的：

- ・ AAC&U における VALUE ルーブリックの開発と活用の方法について。
- ・ CSUF の教員養成分野における教室内・教室外プログラムの指導と学修成果の評価について。
- ・ ケンタッキー州中等教育評議会における活動について。

Association of American Colleges & Universities (AAC&U)

【組織の概要】

- ・ 学士課程教育段階のリベラル教育の質や位置づけに関する先導的な全米組織。
- ・ 1915 年に創設され、現在、1300 ほどの会員校（認証評価を受けた公立私立のカレッジ、コミュニティカレッジ、研究大学、各種総合大学等）を抱える。
- ・ 本部は米国ワシントン D.C.。

Q：AAC&U の主要な業務を教えてください。

- ・ 主に 4 つの業務を行っている。
 - 1) LEAP (Liberal Education and America's Promise)
グローバル社会において必要とされるリベラル教育の推進
その一環としての VALUE ルーブリック (Valid Assessment of Learning in Undergraduate Education Rubrics : VALUE Rubrics) の開発
 - 2) Quality
21 世紀米国における学士課程教育段階の学位の価値の向上
 - 3) Equity
優秀性と学生の成功を含む刷新性の実現
 - 4) Social Responsibility
グローバル社会におけるリベラル学習の統合

Q：VALUE ルーブリック開発の背景を教えてください。

- ・ 近年、米国連邦政府の主導により、学修成果を測定可能な指標で評価する動きが出てきた。(2006 年 9 月、報告書「*A Test of Leadership: Charting the future of U.S. Higher Education*」が連邦教育省に提出)
- ・ ハイスchoolの生徒やその両親が、進学に際して大学やカレッジを比較検討するための明確な指標にアクセスできないという問題が発生。大学やカレッジに透明性とアカウンタビリティの充実が求められた。その結果、税金投入の見返りとして、大学やカレッジの達成度の公開が義務づけられた。
- ・ 達成度は米国連邦政府の推奨した、学修成果を測定する指標、たとえば CLA (The Collegiate Learning Assessment)、MAPP (Measure of Academic Proficiency and Progress) といったテストが化発された。
 - ◇ CLA
在学中に身につけた付加価値の測定が主たるねらいで、批判的思考力 (critical thinking)、分析力 (analytic reasoning)、文章表現力 (written communication) を測定。
 - ◇ MAPP
批判的思考力 (critical thinking)、読解力 (reading)、文章作成力 (writing)、そして数学 (mathematics) といった普通教育 (general education) のスキルを測定。
- ・ 米国連邦政府の推奨するテストへの批判がでてきた、そのような中で、AAC&U のスタッフは上記のテストはある特定の時期の学修成果を切り取って示しただけである。また、学生個々人の得点ではなく大学の得点を示しただけで、大学等の卒業生が有すべきスキルの多くを測定していない。社会で求められている力が付いたかを示してはいない。
すなわち、標準化されたテストが学生の学修成果全般を測定できていないものと考えた。
- ・ そこで、学生の多面的な能力を測定・評価すべく、VALUE ルーブリックの開発に着手。

Q：財源はどうしましたか？

- ・ AAC&U の LEAP の一環として、連邦政府およびステート・ファーム財団から財政援助を得た。

Q：VALUE ルーブリックは何を測定することを目的としていますか？

- ・ 学修をめぐる 3 種類の証拠の収集方法の開発を企図。
 - 1) 教育課程をととして学生の達成した成果から得られた学修。
 - 2) 精巧に作成された大学等ごとのルーブリックと、専門家の判断で評価された学生の学修。
 - 3) 様々な読み手に向けて適切に整理・表示された e ポートフォリオを通じて蓄積された学生の学修。

Q：開発の過程はどのようなものですか？

- ・ 始めに大学教員や学術関係者、学生問題担当専門家などのボランティアな開発チームが 1 年半をかけて、1) 大学等で実際に使用されているルーブリックや学修成果に関する資料の収集。また、2) 電話会議等を通じて、大学教員等の専門家に対し、学生に求められる能力の聞き取り、共通の基準や能力、パフォーマンスレベルを抽出、統合、整理して、VALUE ルーブリックの原案を作成した。
- ・ 協力大学等で実際に試行。試行を踏まえて修正し、再び協力大学等で試行といったサイクルの繰り返し、VALUE ルーブリック（＝“メタ”的ルーブリック）を完成させた。
- ・ 数多くの大学等で使用されているルーブリックに見られる基本的基準を含んでおり、各分野で学生の学修の質を判断する際に重要とされた基準の要約を表している。

Q：VALUE ルーブリック開発はどのような人に協力してもらいましたか？

【VALUE 貢献者】

- ・ VALUE ルーブリックの開発に従事するルーブリック開発チームに属する集団のことで、具体的な開発業務は以下となる。
 - 1) 基本学修成果をめぐる大学等のルーブリックを収集。
 - 2) VALUE ルーブリックを開発。
 - 3) VALUE ルーブリックの試験運用に従事。

【VALUE リーダーシップキャンパス】

- ・ 評価および e ポートフォリオに関する作業に協力すべく、AAC&U によって選ばれた大学等のこと。
- ・ 学士課程教育段階の e ポートフォリオプログラムと、e ポートフォリオに対する評価プロセスを実施していることを前提として、以下の取組を行う。
 - 1) 個々の大学等で使用されているルーブリックを活用しながら e ポートフォリオのサンプルを評価し、結果を共有。
 - 2) VALUE ルーブリックを活用しながら同じサンプルを評価し、結果を共有。
 - 3) 全米審査会議（National Review Panels）での活用に向けて、e ポートフォリオのサンプルを共有。
 - 4) e ポートフォリオの成果を全米に普及するために協働。

Q：VALUE リーダーシップキャンパスはどこですか？

- 1) アルバーノ・カレッジ（Alverno College）
- 2) ボーリング・グリーン州立大学（Bowling Green State University）
- 3) ニューヨーク市立大学ーラ・ガーディアコミュニティカレッジ
（City University of New York・La Guardia Community College）
- 4) サン・マテオカレッジ（College of San Mateo）

- 5) カピオラニ・コミュニティカレッジ (Kapi'olani Community College)
- 6) ポートランド州立大学 (Portland State University)
- 7) ローズ・ハルマン工科大学 (Rose-Hulman Institute of Technology)
- 8) サンフランシスコ州立大学 (San Francisco State University)
- 9) スペルマンカレッジ (Spelman College)
- 10) 聖オラフカレッジ (St. Olaf College)
- 11) ミシガン大学 (University of Michigan)

【VALUE パートナーキャンパス】

- ・ VALUE ルーブリックの開発と試験運用に貢献する大学等のことであり、アメリカン大学 (American University) をはじめとする 78 校が指定。
- ・ ルーブリックの開発と試行を促進する一方、大学等ごとの学士課程教育段階の e ポートフォリオをはじめ、その他の学修成果も評価し、その有効性に関するフィードバックを提供するために VALUE ルーブリックを使用することが求められている。

Q : VALUE ルーブリック開発における基本姿勢は？

1. 全ての学生が質の高い学修を達成する上で、適切な評価データが計画、教育実践そして改善へと導いていくために必要とされている。このことは、教室内学修活動 (curriculum) と教室外学修活動 (cocurriculum) での学修成果こそが学生の学びを最もよく表していることを意味する。
2. 大学は、利用可能な標準化されたテストによって示された学修成果にとどまらず、それ以外の数多くの基本学修成果を創造し、評価することを模索している。
3. 学生が学位取得に向けて、大学内や大学間で教室内学修活動と教室外学修活動という学修上の経路を通過していくにつれて、学修は経時的に発展し、より複雑・精巧になるべきである。
4. 評価に関する優れた取組は多様な評価を要請する。
5. 精巧に構想された e ポートフォリオは、広範な学修成果にまたがった多様な評価からデータを収集するための機会を提供する。同時に、学生の学修を先導し、省察的な自己評価能力を構築していく。
6. e ポートフォリオに記載された学生の成果に関する評価は、期待された目標に対する学生の達成状況をプログラムや大学等に知らせることができる。また、コース内容や教育方法を改善する上で、大学教員に必要な情報を提供することもできる。

Q : VALUE ルーブリックの種類を教えてください。

・3 領域 15 種類

注： 2013 年 7 月現在は 16 種 : Global Learning が追加された。

○知的・実践スキル (Intellectual and Practical Skills)

- ・ 探求と分析力 (Inquiry and analysis)
- ・ 批判的思考力 (Critical thinking)
- ・ 創造的思考力 (Creative thinking)
- ・ 文章作成力 (Written communication)
- ・ 口頭伝達力 (Oral communication)
- ・ 読解力 (Reading)
- ・ 量的分析リテラシー (Quantitative literacy)
- ・ 情報リテラシー (Information literacy)
- ・ チームワーク (Teamwork)
- ・ 問題解決力 (Problem solving)

- 個人的社会的責任感 (Personal and Social Responsibility)
 - ・ 市民としての知識と責務 (Civic knowledge and engagement---
local and global)
 - ・ 異文化間の知識と能力 (Intercultural knowledge and
competence)
 - ・ 倫理的思考 (Ethical thinking)
 - ・ 生涯学習に対する基盤と能力 (Foundations and skills for lifelong learning)
- 学修の統合 (Integrative Learning)
 - ・ 学修の統合 (Integrative Learning)

Q : VALUE ルーブリック活用上の留意点は？

- ・ VALUE ルーブリックは多様な大学等から抽出された共通の基準や能力を含んでいるため、抽象表現で記載されがち。そこで実際の使用に際しては、以下のような書き換えが必要。
 - ◇大学等レベル
 - 大学独自の文脈や理念、文言などに関する表現に書き換え。
 - ◇プログラムや専攻レベル
 - 当該専門分野の概念などに関する表現に書き換え。
 - ◇大学教員レベル
 - VALUE ルーブリックが効果的に活用されるよう、個々の授業におけるアサインメントのねらいや意義等を踏まえて書き換え。

Q : VALUE ルーブリック活用の事例は？

1. discipline (専門分野) 別に活用
 - ・ 分野
 - 工学 (engineering)、社会福祉 (social work)、看護 (nursing)、公衆衛生 (public health)、医学 (medical)
 - ・ 事例
 - 1) ミシガン大学大学院 (ミシガン州)
 - 2) ロマリンダ専門職大学院 (カリフォルニア州)
 - 3) ドルー大学大学院 (ニュージャージー州)
2. 異なる大学等で共通のアサインメント
 - ・ 同一学生が異なる大学等でアラカルト式に科目を履修できるシステム (イリノイ州シカゴ)
 - ・ 事例
 - South Chicago Metropolitan Consortium (12 の機関が加盟)
3. 評価に e ポートフォリオを併用
 - ・ 事例
 - 1) ソルトレイクシティコミュニティカレッジ (ユタ州)
 - 専門分野別
 - 2) ポートランド州立大学 (オレゴン州)
 - コミュニティをベースにした学修活動を実施
4. スタディアブロードやインターンシップで活用
 - ・ 事例
 - 1) ミシガン大学 (ミシガン州)
 - 2) ミシガン州立大学 (ミシガン州)

- 3) ジョージタウン大学 (ワシントン D.C.)
 - 4) ロヨラ大学 (イリノイ州シカゴ)
 - 5) Worcester Institute of Polytechnics (マサチューセッツ州)
全学生が海外に行くことを求められている
5. 具体的文言に書き換えて活用
- ・事例
 - 1) ワシントン州立大学 (ワシントン州)
 - ・コミュニティベースで大学と企業との連携を構築
 - ・企業が学生に求める能力や期待する力を表明
 → インターンシップの観点からも興味深い事例
 - 2) ブランドマン (Brandman) 大学 (カリフォルニア州)
 - ・コースあるいはレベルに応じたルーブリックを作成
 - 3) デーモンカレッジ (Daemon College) (ニューヨーク州)

Q : デーモンカレッジ (Daemon College) における活用はどのようなものですか？

1. 概要
デーモンカレッジ仕様に書き換えた VALUE ルーブリックを使って学生のワークシートを採点するプロジェクトが実施され、その結果が報告書にまとめられている。
2. 実施時期
2011 年 5 月 25 日 9:30～14:30
3. プロジェクトのねらい
コアカリキュラムのなかでも、「研究とプレゼンテーション」(research and presentation) に関する学修目標やその達成に関するデータを提供すること。
4. 「研究とプレゼンテーション」の学修目標
 - 1) 専門分野の概念を獲得し、発展させ、そして伝達するために効果的に読み、書き、そして聞くこと。
 - 2) 理論、探求、適用を通じて専門分野の知識を蓄積すること。
5. ルーブリック書き換え作業の担当者
Erica Frisicar-Pawlowski (writing coordinator) が、Abby Dubisar (writing in the discipline specialist) と Intisar Hibschiweiler (core director) の協力のもと、3 種類の VALUE ルーブリックを組み合わせ、「研究とプレゼンテーション」のルーブリックを作成。

種 類	評価の観点
探求と分析力 (Inquiry and analysis)	・ 結論 (conclusion)
情報リテラシー (information literacy)	・ 情報の倫理的かつ法的なアクセスと活用 (access and use of information ethically and legally) ・ 特定の目的を達成するための情報の効果的活用 (use information effectively to accomplish a specific purpose)
文章作成力 (written communication)	・ 形式と専門分野の伝達 (genre and disciplinary conventions) ・ 構文と技巧のコントロール (control of syntax and mechanics)

Q：「研究とプレゼンテーション」に関するワークシート収集はどのようにしましたか？

- ・ 2010 年秋学期と 2011 年春学期の「研究とプレゼンテーション」の履修学生による 231 のワークシートのなかから、50 のワークシートをランダムに抽出。

Q：採点に参加した教員数は

- ・ 31 名で。過去 2 年間、デーモンカレッジのフルタイム専任教員の採点作業への参加率は少なくとも 30%。また、採点作業も含むプロジェクト全体への参加率は過去 4 年で平均 40%以上である。

Q：採点プロセスはどのようなものですか？

- (1) 参加教員は 3 人ずつ計 10 のグループに分かれ、「研究とプレゼンテーション」ルーブリックを使いながら、各グループ 5 つのワークシートを採点。各グループには、ワークシートの専門分野に関する教員が少なくとも 1 人は含まれるように配置。
- (2) 各グループで、3 人の採点結果を比較。
 - ・ 3 人の採点結果が同じ → 評価決定
 - ・ 採点結果にズレ → 3 人で協議し、修正

Q：開発に参加した教員の感想は？

1. 何が作業に必要であったか？
 - ・ ルーブリック（ルーブリックは「プレゼンテーション」を重視し、「研究」を重視していない。また、統合や分析といった批判的構成要素を包含していない。）
 - ・ ワークシート（「研究とプレゼンテーション」は専門分野間で一致していない。これは専門分野ベースの教員によってより良く採点されるのか？）
 - ・ スケジュール（5 月下旬よりも別の日程に実施してほしい）
 - ・ ルーブリックの使用（同一学生を 1 年から 4 年次まで評価するためにルーブリックを使用する必要がある）
2. 何が機能したか？
 - ・ ルーブリックの構造
 - ・ 採点作業の開催場所
 - ・ 他の教員と協働で作業したこと
 - ・ ルーブリック（全般的にルーブリックはこの採点作業でよく機能した）

Q：書き換えたルーブリック使用からどんな示唆が得られましたか？

1. 各学科に「研究とプレゼンテーション」ルーブリックの使用を奨励すべき。
 - 客観的成績評価の点で有効
2. 各教員は、VALUE ルーブリックで用いられているそれぞれのレベルの文言を明確に定義し、共有する必要がある。
 - （例）何がレベル 2 といえるのか？
 - 他の文言がレベルを記述するために用いられるべきか？

ケンタッキー州中等教育後評議会

【組織の概評】

ケンタッキー州中等教育後評議会は、1997 年のケンタッキー州短大教育改善法により設立。ケンタッキー州の高等教育システムの変化と改善を調整する。

評議会は 13 の市民、1 教員、および知事によって任命された 1 人の学生と 15 人の市民委員で構成される。市民委員は、1997 年ケンタッキー州中等教育改善法に定める指名プロセスの下で知事に提供される候補者のリストから選択される。

Q：Tuning の概念とは？

A：多様な中等後機関における多様な学修成果の違いを調整するために、コアとなる能力は何かを調整する試み（チューニング）がなされている。ただし、これは能力や学習内容を標準化する試みでは決していない。

Q：Tuning の主な活用場面は？

A：主に 2 年制コミュニティカレッジから 4 年制大学へのトランスファーにおいて、コアとなる能力の基準をチューニングすることなどが挙げられる。

Q：Tuning の現状はどのようになっているのか？

A：ケンタッキー州の Tuning USA では、チューニングの取組が開始されて間もないという事情もあって、コアとなる能力のチューニングはなされつつあるけれども、能力をどのような方法で学習するのか、学習した結果をどのように評価するかなどの点はチューニングされておらず、各教育機関の裁量に委ねられている。

Q：Tuning の取組にはどのような団体が財政支援を行っているのか？

A：ルミナ（LUMINA）財団からの財政援助により、とりわけトランスファーの前後の単位取得を調整する作業が実施される。

Q：小学校の実習に関する Tuning はどうなっているのか？

A：あまりにも複雑なため、ルーブリックを使っていない。大学教員など 3 人の委員が学生を評価する観点を事前に決めて分担した上で、実習において各委員が評価している。

カリフォルニア州立大学フラトン校（CSUF）

【大学の概要】

- ・ 105 の学士課程、100 の修士課程、1 つの博士課程を提供し、約 3 万 5,000 人以上の学生が学んでいる大型州立総合大学。
- ・ 学生の数ではカリフォルニア州内では UCLA、UC バークレー校に次いで第 3 位の規模。
- ・ 大学のレベルは高く、2011 年度の U.S. News & World Report で西部の州立大学の中でトップ 6 にランクイン。
- ・ 世界 80 カ国から 1,075 人の留学生が学んでおり、全体の学生の 60%が米国以外の言語、民族、文化的バックグラウンドを持っている。

今回はカリフォルニア州教員養成制度の基本枠組みについて尋ねた。

Q：主な免許状の種類は？

- ・ 複数教科の本免許・仮免許状 → 主に公立小学校が対象
- ・ 単一教科の本免許・仮免許状 → 主に中学・高校が対象

Q：免許状取得の流れは？

- ・ 仮免許状取得 → 要件：学士以上の学位取得、基礎学力の証明等
- ・ 本免許状を仮免許状取得後 5 年以内に取得 → 要件：所定の教員研修プログラムの修了等

Q：仮免許状取得に際しての基準をめぐる近年の動向は？

- ・ カリフォルニア州法（Chapter 517, Statutes of 2006）により、2008 年 6 月から、複数・単一教科の仮免許状（preliminary Multiple and Single Subject Teaching Credential）の取得をめざす教員志望者全員に対して、「教育実践に関する評価」（Teaching Performance Assessment；TPA）に記載されている「課題」（task）をクリアすることが規定された。そこで大学の教員養成プログラムに「課題」が組み込まれた。
- ・ TPA は、カリフォルニア州の「教育実践への期待」（Teaching Performance Expectations; TPEs）などで規定されている教員志望者の知識、スキル、そして能力と連動して活用・評価される。
- ・ 教育実践は、一定の訓練を受けた評価者（assessors）によって、各「課題」等のルーブリックに基づき評価される。

Q：TPA に課題はなんですか？

1. 教科特有の教育方法に関する課題（Subject-Specific Pedagogy Task）
2. 教授デザインに関する課題（Designing Instruction Task）
3. 学習評価に関する課題（Assessing Learning Task）
4. 教育経験を最高潮に高めることに関する課題（Culminating Teaching Experience Task）

Q：TPEs について詳しく説明してください。

- ・ 6 領域 13 項目から構成された教員志望者に求められる知識、スキル、能力

領 域	項 目
A. 教科内容を生徒に理解しやすくする	TPE1：教科指導のための特定の教授技法
B. 生徒を評価する	TPE2：指導中、生徒の学習状況を把握すること TPE3：評価を解釈し活用すること
C. 学習する生徒に関わり、支援する	TPE4：教科内容にアクセス可能にすること TPE5：生徒の学習活動への参加 TPE6：発達段階に即した教育実践 TPE7：英語学習者を指導すること
D. 指導を計画し、生徒のための学習経験をデザインする	TPE8：生徒について学ぶこと TPE9：指導計画を立てること
E. 生徒の学習に対する効果的環境を創造し、維持する	TPE10：指導時間 TPE11：社会環境
F. 専門性ある教師として成長する	TPE12：専門的・法的・倫理的義務 TPE13：専門性の向上

Q：TPA と TPEs の対応関係はどのような者ですか？

TPA の「課題」	TPEs の領域	TPEs の項目
○課題 1 教科特有の教育方法に関する課題	A	1
	B	3
	C	4,6,7
	D	9
○課題 2 教授デザインに関する課題	A	1
	C	4,6,7
	D	8,9
	F	13
○課題 3 学習評価に関する課題	B	3
	C	6,7
	D	8,9
	F	13
○課題 4 教育経験を最高潮に高めることに関する課題	A	1
	B	2,3
	C	4,5,6,7
	D	8,9
	E	10,11
	F	13

Q：TPA の評価者はどのようなひとたちですか？

- ・ 大学教員 (faculty)、教師 (K-12 teachers)、管理職 (administrators)、監督者 (supervisors)、メンター (mentors)、支援提供者 (support providers)、退職大学教員、退職教師、教職の専門性を有する者 (education professionals) で、多様なアクターが評価する。

Q：評価者に対する研修はどのような者ですか？

- ・ 教員免許委員会 (Commission on Teacher Credentialing) が主催研修。
- ・ 内容
オリエンテーション 1 日間 + 4 つの「課題」それぞれに
特化したプログラム 2 日間
- ・ 先導的評価者 (Lead Assessors) に対する研修も提供。

Q：TPA ではルーブリックを使用しますか？

- ・ 使用します。評価者は、教員免許委員会の作成したルーブリックに基づいて教員志望者の教育実践を評価。
- ・ ルーブリックはカリフォルニア州教員免許委員会のウェブサイトで公開され、ダウンロードも可能。

Q：TPA で使用するルーブリックはどのようなものですか？

- ・ 4 つの「課題」と TPEs の 13 項目に対応して作成。
- ・ レベルは 1～4 までの 4 段階。

- ・ 学生は 4 つの「課題」で合計 12 ポイントの取得が必要（レベル 1＝1 点、レベル 2＝2 点、レベル 3＝3 点、レベル 4＝4 点）。いずれの「課題」の評価においても 2 点未満は不可（※ただし、CSUF では 2 点以下を不可と設定し、2 点を 3 回とってしまうと落第に）。

Q：教室外学修の評価はどのようにしていますか？

- ・ 指導計画書（lesson plan）やクラスマネジメント計画（class management plan）などに関するルーブリックを作成。
- ・ 学生の実習を CSUF の監督者（supervisor）が評価するシートも別に作成。
- ・ 州作成のルーブリックに加え、USCF でも独自にルーブリックを作成。
 - ・ 場面に応じて、多様なルーブリックなどを作成。出典・参考資料
- ・ AAC&U のウェブサイト
<http://www.aacu.org/>
- ・ Daemon College, *Core Curriculum Assessment Report-spring 2011 project: evaluation research and presentation course papers, using the draft research and presentation rubric (based on AAC&U VALUE Rubrics)*.
- ・ Cal TPA のウェブサイト
<http://www.ctc.ca.gov/educator-prep/TPA-California-candidates.html>
- ・ Teaching Performance Expectations のウェブサイト
<http://www.ctc.ca.gov/educator-prep/tpa-files/candidatehandbook-appendixa-tpes.pdf>
- ・ Credential Program Standards のウェブサイト
<http://www.ctc.ca.gov/educator-prep/standards/adoptedpreparationstandards.pdf>
- ・ CSUF Faculty Development Center のウェブサイト
<http://fdc.fullerton.edu/>

**大学間連携共同教育推進事業
米国先進事例調査報告書**

訪問期間：2013 年 8 月 22 日～30 日

出張者：濱名篤、藤木清、越山泰子

出張先：セントオラフ・カレッジ（ミネソタ）、カールトン・カレッジ（ミネソタ）、
クレムゾン・ユニバーシティ（SC）、ノースキャロライナ大学ウィルミントン校（NC）

目的：テリル・ローズ博士、チャールズ・ブライチ博士らの紹介により、大学の教育目標（＝L.O.（Learning Outcomes）、L.G.（Learning Goals））をベースにした評価を実施している大学を訪問し、評価の方法等を中心に取材した。

所感：いずれの大学も、accreditation 団体などの外部からの圧力で大学の教育目標を設定して、それが達成できているかどうか評価を行っている。また、仕組みも大事だが、教員の意識の共通化が大事である。本学でもアウトカム（ベンチマーク）の評価を実施すべきと感じた。

【セントオラフ・カレッジ】

（概要）

- ・ 学生数約 3,000 人。
- ・ 海外経験者は 70-80%。
- ・ 大学の収入の 70%は授業料、10%寄付（卒業生も）、あとは政府からの補助金。
- ・ 授業料は年間 500 万円＝80%の学生は何らかの助成を受けている。
- ・ 授業料を高くして、奨学金を厚くする戦略。当然教育力をしっかりしなければならない。

⇒リサーチ大学ではなく、教育重視。

- ・ミネアポリスの新聞が、大統領は大学の授業料が高いことを批判しているが本学はそうではないという記事を出した。
- ・卒業時には学生は 27000 ドルの借金があるが、ほとんどが返済し、返済しないのは 1.6%。
- ・この地域から来る学生は 50%。そのほかは全国から集まっており、全国化している。
- ・過ごしやすいキャンパスで、週末もキャンパスにいる。
- ・ルームシェアがほとんどないため、社会性を身につけるプログラムもある。
- ・本学への留学は 41 か国から。強いて言えば中国からが多い。
- ・大学内の案内は学生がしてくれた。高校生とその家族が大学を訪問し、学生が学内を案内している光景を目にした。

(評価関係)

- ・教育目標（8 つラーニング・ゴール）を明文化したのは昨年。ウェブサイトに掲載している。
- ・IR オフィスは専任 4 人。
- ・いくつかの評価ツールを使用（BCSSE、FSSE、NSSE、HEDS、CLA、…）
- ・すべての評価ツールを毎年やるのではなく、おおむね 3 年周期になるように調整。スケジュールは HP にも掲載。（末尾）
- ・IR オフィスでは学修成果の達成を評価するために各科目のデータ（おそらく総括的評価＝ルーブリックも。）の収集し、学年集団の特徴を把握し、上層部等へ報告する。
- ・IR オフィスは大学評価のために科目担当者からルーブリックのデータを集めている。IR オフィスから科目担当者や学部に対してはフィードバックは行っていないようである。
- ・IR オフィスは科目担当者にどのように評価を行えばよいかの相談にはのっている。教育改善については各学部で自分たち活用する。ルーブリックをどのように使うのかも学部で考える。

St. Olaf College Data Collection Schedule						
	2012-13	2013-14	2014-15	2015-16	2016-17	2017-18
Institutional						
Collegiate Learning Assessment (CLA)	FY (Week One) SR (Spring)			FY (Week One) SR (Spring)		
Beginning College Survey of Student Engagement (BCSSE)	FY (Week One)		FY (Week One)			FY (Week One)
National Survey of Student Engagement (NSSE)	FY (Spring) SR (Spring)		FY (Spring) SR (Spring)			FY (Spring) SR (Spring)
HEDS ¹ Research Practices Survey (RPS)		FY (Week One) FY (Spring) SR (Spring)			FY (Week One) FY (Spring) SR (Spring)	
Essential Learning Outcomes Assessment (ELOA)		FY (Week One) FY (Spring) SR (Spring)		FY (Week One) FY (Spring) SR (Spring)		
National Collegiate Health Assessment (NCHA)		All classes (Spring)			All classes (Spring)	
HEDS ¹ Alumni Survey			Class of 2010		Class of 2012	
Recent Graduates' First Destination	Class of 2012	Class of 2013	Class of 2014	Class of 2015	Class of 2016	Class of 2017
Department/Program						
Assessment of Majors, Concentrations, and other Academic Programs	Majors	Concentrations Conversations Other Programs	Assessment Action Projects		Majors	
Study Abroad Learning Assessment (SALA)	Fall and Spring	Fall and Spring	Fall and Spring	Fall and Spring	Fall and Spring	Fall and Spring
Strategic National Arts Alumni Project (SNAAP)				All classes (Fall)		
General Education						
Assessment of General Education				Individual GE Courses		
Faculty						
Faculty Survey of Student Engagement (FSSE)	Spring		Spring			Spring
HERI ² Faculty Survey		Fall			Fall	

¹Higher Education Data Sharing Consortium

²Higher Education Research Institute

- ・HIP は LC プログラムが 3 つあり、グループごとにデータを集めている。
グレイト・カンパセーション、アメリカン・カンパセーション、エンバイロメント・カンパセーション
- ・IR オフィスではデータは学生支援には使用していない。個々の学生の学生支援は学生課 student affair が行う

・ルーブリックは多くの授業で使用されている。ただし、共通のルーブリックではなく、ルーブリックなどを使って evidence が残るように厳格にするという共通の認識の下、各科目で独自に作成されているようである（教育学部は教職の国（？）のスタンダードがあるとのこと）。

・教員（学生も？）の意識や方向性を共通化し、教員は科目に応じてアレンジしている。

・形成的評価は普通に行っていて学生のフィードバックも行う。

【カールトン・カレッジ】

（概要）

- ・学生数約 2,000 人。創立 1866 年。約 150 年の歴史。共学。学部教育に徹している。
- ・ランキングはよい方だが、意識せず、自信過剰にならずに常に改善している。
- ・4 年卒業率は 89-90%。10%は休学。
- ・評価にも力を入れている。現在の状態は自分（学長）の功績ではない（3 年前に着任したばかりなので）。
- ・大学レベルの評価は、セントラルでデータをコレクションしている。プログラムごとのアセスメントはプログラムで行っている。
- ・まず目標（Expected Outcomes）を設定し、達成状況の評価する。必要があれば Outcomes を変更する。
- ・リサーチ大学ではないので、教育力を評価。

（評価関係：ライティングポートフォリオ）

- ・ライティングポートフォリオを実施している。
- ・一年に 1 回 2 年次生 500 人分の学生のペーパーをルーブリックで評価。ライティングポートフォリオはキャロル先生が統括。3 科目以上のペーパー（学生が選択）をルーブリックで評価する。40 人の教員で 3 日間かけて採点。4 時間×3 日＝12 時間。教員は依頼する。評価は教員二人で行い、評価が大きく分かれたときには 3 人目がみる。
- ・毎年の実施で 2 年生のレベルがよくわかる。⇒データは学部で自由に使える。各科目の評価に関する改善につながる。（例：レポートが悪くてもポートフォリオが書けている。）
- ・問題ありの学生は、キャロル先生が個人指導。大きな問題は、書きたい内容はあるが、それを表現できない学生がいる。
- ・10 年前から実施している。効果として、教員の意識が高くなっている。また、学生のライティング力が上がっている。
- ・1 年次にライティングの必修科目がある。そのほか、ライティングを含んだ科目がある。
- ・アカデミックでない問題は学生課が対応する。
- ・ライティングポートフォリオは 5 年に一度評価を行う。

（評価関係：その他）

- ・卒業生への調査も実施。教育がどのくらい役に立っているか、貢献しているのかをみる。
- ・学生データは、ルーブリックアセスメント。
- ・大学レベルの評価はサンプリングで実施。
- ・CLA は単純すぎるため使っていないとのこと。

【クレムゾン・ユニバーシティ】

（概要）

- ・学生数約 18,000 人、教員数約 1,200 人。
- ・編入は 2,600 人可能。現在は 1,200 人。編入前の大学からポートフォリオを反映できる。
- ・編入者は最低 3 学期と必要な単位数をとれば卒業。

（評価関係－e-ポートフォリオを使ったラーニング・アウトカムの評価）

《方法》

- ・大学(GE)のラーニング・アウトカムは従前には 22 あったが、2008 年に 9 つに減らした。
- ・Arts and Humanities, Mathematics, Natural Sciences, Social Sciences, Critical Thinking, Cross-Cultural Awareness, Ethical Judgment, Science and Technology in Society, Communication

- ・この 9 つのうち、Communication を除く、8 つについて学生はポートフォリオにエビデンスを載せる。卒業の 1 か月前までにポートフォリオ評価に合格しなければならない。8 つの各項目 1 点以上。合計 15 点以上。
- ・e-portfolio の評価は 7～8 人で行う。8 つのエリアごとに責任者がいる。
- ・卒業生は年間約 4,000 人。卒業式は 3 回。評価する教員 7、8 人は、先週、125 人分の評価をしなければならなかった。
- ・やり方は教員によって異なる。(数学の先生は学生をトレーニングして学生に評価させるとのこと。) 形成的評価として使用し、最終的に基準に合っているか。
- ・基準は 0、1、2、3、4、FL、GW。0 の場合は指導する。0 の評価は内容が違うものを書いているとき。⇒正しい方向に向ける。(例: 数学のポートフォリオなのにビジネスの内容になっているなど。)。FL、GW は評価できないため、別のマテリアルを求める。
- ・CT と EJ は汎用的な目標なので、3or4 に評価されるのが望ましいと考えている。
- ・ある項目について弱い人がいると、シラバスに戻って教育を受けているかチェックする。⇒学部に戻す。
- ・今年 3,400 人中 15 人が合格できなかった。これらの学生は他の問題も抱えている。
- ・評価材料は学生が決める。ロングエッセイやケーススタディもある。

《学生への支援・指導》

- ・学生には、1 年生の 1 学期にワークショップを行う。
- ・Academic Success Center は、ポートフォリオを作成するための指導・助言をおこなう。できる学生が支援の手伝いをやっていた。
- ・学生には早くアップするよう指導している。今年は 8 月に学生にメールを送った。

《その他》

- ・2004 年から各学部から選ばれた教員で、GE の委員会をつくった。
- ・GE について学期の初めに目的とその内容をシラバスに盛り込むよう通達。
- ・クリティカルシンキング (CT) のアセスメントをどのように行うのかを検討するためにプロジェクトチームが編成された。
- ・当初は変化しないという声⇒どうやって変えるのかは現場の教員からでてきた。
- ・夏に教員向けワークショップを実施。Workshop は当初 25 人でやっていた。50 人に増やすように指示があったが、現在は 25 人で実施。何を使っているか。様々な分野の人に出てもらって経験談をはなしてもらう。1 年間トレーニングして、次の夏のメンターになる。
- ・Workshop では、他大学からスピーカーを呼ぶ。

(QEP)

- ・学業成績や入試情報、ETSPP の個人データを集積するシステムを構築中。
- ・学外活動 (HIP) についても今後集積する予定。
- ・個人データはプロボストのみ閲覧可能。今後、何らかの集団で集計することにより評価に使える。

【ノースキャロライナ大学ウィルミントン校】

(概要)

- ・学生数 13,000 人 8 月 21 日 (水) から新学期スタートした。
- ・8 月～12 月：秋学期、2 月～5 月：春学期。
- ・40%は編入できるシステムを作っている。二年制を取る人もいる。

(評価部門)

- ・学生の outcomes の評価が主な仕事。
- ・ポートフォリオを使った、LO のアセスメントを実施している。

- ・ UNCW Learning Goals はつぎの 8 つ。
Foundational Knowledge, Inquiry, Information Literacy, Critical Thinking, Thoughtful Expression, Foreign Language, Diversity, Global Citizenship
- ・ 8 つの LG について、学生がマテリアルを自由に選び評価してもらう。
- ・ CT は関係しているクラスを選んで学生のサンプル（200 人）をとる。
- ・ CT の評価者は 15 人。ルーブリックで採点した。
- ・ 1 学期で 2 つの LG を評価した。
- ・ Workshop を実施。WS は 2 日半。1 日 8 時間。
- ・ 採点は二人の教員で行い、差が出たときには平均をとる。
- ・ 学生にフィードバックしない。大学の評価のためにやる。
- ・ 共通ルーブリック=VAUE の利点。個人のルーブリックではわからなかった。
- ・ 15 のクラスにしているのは①数量的に把握するため。②多くの教員を巻き込むことによって共通理解を図ることができるため。
- ・ テストよりもルーブリックがよいのはどこが悪いのかわかること。
- ・ Applied Learning Critical Reflection Scoring ルーブリックを使っている。

（IR 部門）

- ・ 6 年前からスタート。
 - ・ IR の仕事は情報公開や政府関係への報告のためのデータ収集と集計・分析。
 - ・ 使用している評価ツール USC のシステムで統一。
CLA、ETSPP、NSSE、（WNS は使用中止）
○CLA：お金が出るのと全体像がわかるのでよい。
○MAPP：メジャー別のリストがわかる⇒ETSPP に移行。
○NSSE：オンラインで取れる。間接評価だが、ID をつけて個人を識別することが可能⇒学内の専用の ID をつけている。
 - ・ 学生にはメールで催促する。学生に懸賞金をつけている。
 - ・ NSSE は信頼性が高く集計結果をすぐに利用できる。学生の様々なことがわかる。
教員は結構難しいことを指せているつもりだが、学生はそれほどにも思っていないことがよくあった。教員の思っていることと学生が思っていることが違う。
- （ただし、別の教員の話では、NSSE はやっているが、1 時間半かかるはずなのに 40 分で学生は答えてしまう。まじめに答えないので意味がないとの話もあった。）

○就職課では卒業後の調査（卒業生対象）をメールで実施。

- ・ 大学で学んだことが仕事で役に立っているか。
- ・ 自分の専門分野の仕事をしているか。
- ・ 収入はどのくらいか。
- ・ データは、FD やチューターセンター、広報へ提供。
- ・ WNS は大変。やってもよいと言ってくれた学生も一度やったら二度とやりたくないとのこと。＝モチベーションの維持が難しい。HEDS から脱退（資金面）。
サンプルサイズを増やしたいのに、やる学生が減る。⇒統計的な意味がなくなる。
- ・ CLA は SAT を基にして作られている。⇒SAT の点数と比べられる点はよい。しかし、SAT は高校の GPA との相関は高いが大学の GPA との相関は低い。
- ・ Output：状態ではない。GPA は Output。たとえば同じ 2.00 でも Outcome が同じであるということを示していない。
- ・ Outcome：状態を示している。GPA が低くても、できていることがある。

(学生課の評価担当)

- ・学生の課外＝コ・カリキュラムおよびエクストラ・カリキュラムの評価を行う。
- ・プログラム例：インターンシップ、寮の LC、コンサート、学生会、全学的な活動、チューター。
- ・活動をまとめてレポートにし、情報公開する。自己評価はいいことしか書かない⇒客観的なデータと合わせている。
- ・プログラム評価であり、個々の学生の成長などは分析しない。
- ・フォーカスグループインタビューとアンケート（何を学んだか）。
- ・1 年たった時にどのような効果が出ているか。長期データをやりたい（まだやっていない）。
- ・ラーニングアセスメントコミッティ＝データを突き合わせて話し合う。
- ・まとめて大学（Provost）に報告する。
- ・課外活動（エクストラ・カリキュラム）に関するパーソナルなデータを充実しても企業は気にしない。大学を出ることが大事。雇用者は大学教育を見ていない。現実社会に影響を与えていない。
- ・効果のあるプログラムは、オリエンテーションキャンプ、寮の補佐、メンターではないか。

以 上

**大学間連携共同教育推進事業
米国先進事例調査報告書**

訪問日時：2014 年 9 月 29 日（月）

訪 問 先：La Guardia Community College

対 応：Bret Eynon, Ph.D.

(Associate Dean for Academic Affairs, Director, Making Connections National Resource Center) ほか

(e ポートフォリオの活用について)

ラガーディア・コミュニティカレッジでは、2001 年から e ポートフォリオを使用しているが、その特色として、e ポートフォリオを教授法（pedagogy）および大学全体のプログラム評価に使用している点がある。つまり、e ポートフォリオを学生の学びの評価として使用すると同時に、学生が e ポートフォリオを作成する過程が大学教育そのものでもある。

このポートフォリオによって、大学は個々の学生データとそれぞれの学びの成果を把握することができる。また、このシステムは、学生の学びのために大学側が提供するプログラムや実行性を評価できるようにも設計されている。学生が履修するすべての科目での評価は、e ポートフォリオ評価データベース（ePortfolio Assessment Database）に保存される。これによって、学生が自分で保存している e ポートフォリオとは別に、特定の科目における学生の学びの成果物を収集し、検討することが可能となっている。ここに蓄積された学生の成果物に関するデータは、毎年実施している大学の定期的プログラムレビュー（Periodic Program Review）に利用され、学生の学びを評価するための特別に訓練を受けた教員メンバーによる共通教育（一般教育）ベンチマーク評価にも利用される。これは大学が開発したルーブリックを用い、オンラインで学生の成果物を評価するようになっている。

このラガーディア・コミュニティカレッジの e ポートフォリオシステムは、補助金を得て、e ポートフォリオに関して指導的な役割を果たしている他の 22 大学と連携して、最優秀全米 e ポートフォリオ利用組織の設立をめざしている。主たるメンバー大学には、ボストン大学、インディアナ大学、ペイス大学、サンフランシスコ州立大学、ロングアイランド大学などがあり、東海岸から西海岸にいたる地域の大学が参加している。

(学生支援と啓蒙)

e ポートフォリオの使用を支援するため、ポートスタジオ（ePortfolio Studios）を設けて、e ポートフォ

リオ技術助言者を配している、

また、eポートフォリオスカラズ（ePortfolio Scholars）という制度を設けている。これは毎学期、この制度に参加する学生グループを選定し、アドバイザーや先輩たちとチームを組んで、eポートフォリオに関する技術の習得に励み、かつ内容的にも成長することをめざすプログラムである。優秀者には100ドルから450ドル、最優秀者には500ドルが奨学金として提供される。

訪問日時：2014年9月30日（火）

訪問先：Wagner College

対応者：Anne Goodsell Love, Ph.D.ほか

（統合学習）

ワグナー大学では統合学習を、ラーニング・コミュニティ（LC）制度として推進している（“Wagner Plan”と呼ぶ）。この制度では、一学期3つのコースが用意されており、学科が異なる担当教授2人ずつが1つのテーマを決定してコースを受け持つ。同時に、インターンシップはLCを取る学生にとっては必修になっている。理系は実習をもってかえる。

LCは1コース当たり単位3.3credit=1unit。creditは編入学の際の換算に利用。卒業には36ユニットをとる必要がある。同大学ではユニットという表現を使い、他校への転校の際にはクレジットを使う。1年次は30時間のインターンシップのための導入体験をする。4年次には本格的なインターンを必須とする。2、3年は選択制。LCの数は4年間で大体28グループある。1年次用には20人～24人単位のコースが3～4つ用意されている。専攻が決まっている学生は複数受講し、決まっていない学生は1つ履修する。教える学科はあくまでも一般教養科目に限定している。

ワグナー大では、全体的な教育ストラクチャーを作っていて、1年生：体験的なものを必修、2、3年生：選択必修、4年生：必修科目となっている。LCについてはすべての学生が卒業まで履修しなければならない、教師も必ずそこに参加しなければならない。19のLCがあるから、フルタイムの先生は38人が担当している。したがって、30パーセント以上の教師がLCで教えている。学生の評価は教員がLCごとに自由に行う。評価のやり方はレポート、テストなど教員の裁量となる。ルーブリックを使う教員もいれば、使わない教員もいる。

ワグナー・プランを始めてから、70%を切っていたリテンション率が90%近くまで向上した。理由は、LCは学問的なことを学ぶだけでなく、教師との交流の場ともなっていて、学生たちにとっては先生に相談に乗ってもらえる機会となっているからだと考えている。

LCの内容に関する評価は行わないが、新しいコースについてはアカデミックポリシー委員会の承認を得なければならない。この委員会は異なった学部（学科）の教員によって組織されている。もし、教師が新しいコースを教えたいければ、2回に限り自由に教えることができる。その後も続けて教える場合は学部がそれを承認する必要がある。

プログラムアセスメントについては、学生に統合学習が自分の中でどの程度うまく統合されたか、校内と学外での学びがしっかり関係づけられたかといった相互の関係について学生に調査している。ここの学生のデータについては、調査するときに学生IDを聞いているので、リテンションの調査、サービ斯拉ーニングの結果などには使うことができる。

（その他）

大学の国際体験授業や多様性理解および広報の方策について調査した。

訪問日時：2014年10月1日（水）

訪問先：South Metropolitan Higher Education Consortium

対応者：Genevieve F. Boesen（Executive Director）

(ライティング・アセスメント)

この団体の活動範囲は、50 平方マイルに限られていて、加盟校は 13 である。約半数が職業訓練校や短大、そして残りの半数が 4 年生大学であり、公立と私立の割合は半分ずつである。この地域では、学生の移動が激しく、編入学が盛んにおこなわれている。そのため、大学間の学生のライティングスキルを平準化し、共通のアセスメントする必要がある。

その前提として、加盟校全体で“English 101”を教えることが合意された。また、共通評価のために同じルーブリックを使って評価することとした。使っているのは、AAC&U が開発した VALUE ルーブリックの Writing Rubric である。教科書は標準化していないが、教える内容はルーブリックのそれぞれの項目に該当するものでなければならない。そのため、ルーブリックがライティングの授業をある程度標準化することとなる。

アセスメントとグレーディングは異なる。グレーディングでは、ライティングスキルだけでなく、宿題をしてきたか、その結果はどうか、出席日数はどうか、クラスへの貢献度はどうかなど、いろいろ別の要素が加わる。そのため、ライティングルーブリックでは、ライティングスキルの達成度のみを評価する。評点については各大学や学部ストラクチャーがある。科目内容などは別に評価する。ただ、アセスメントのためには必ずカリブレーションをしなければならないため、今まで各学期 2 回カリブレーションをしている。これは大変な作業である。

ルーブリックを変更する場合、まず、教師たちによってどのように変更すべきかの議論をし、その議論の中で出されたキーワードをすべて書き出して（これをチチと呼ぶ）、それについてまた議論をして必要なものをルーブリックに加える。つまり、ルーブリックを変更するのではなく、必要に応じ項目を足している。

他州や地域からくる学生の英語レベルを計るのには ACT (American College Testing) などを使って各大学で基準を決めている。また、Compass Test もよく使われている。各大学が合格レベルの成績を決めるため大学によって合格点は違う。ただし、これらのテストは選択問題。だから、ライティングのレベルを計るための工夫が必要になっている。

なぜ、ライティングなのか。考えることやプレゼン、分析、他の能力の基本になっている。自然科学をやる学生にとっても人生を変えるほどのものである。物事の考え方やコミュニケーション能力が高まる。ハーバードに行った学生もいる。学生の評価をしたらライティング以外の能力にも重なっている部分が多い。

訪問日時：2014 年 10 月 2 日（木）

訪問先：Wabash College (HEDS)

対応者：Charles Blaich, Kathy Wise

(連携校間でのハイ・インパクト・プラクティスのデータシェアについて)

HIP を何度も経験した学生は学修成果にも高い数値が現れると思うが、それを比較するにはデータ数が足りない。それを改良するために、連携校間でのデータシェアをしたいと考えている。これに対するアドバイスをもらいたい。

(ワバッシュ大学)

比較のためのデータを集める場合、自分の大学と同じような規模の大学との比較でないとあまり有意義ではない。また、各大学の調査担当者はいつも学内の同僚や組織間の調整をする必要がある。大学間のデータ共有は神経質なものであるので、他の大学の人たちとの信頼醸成にはワークショップをするのが良い。

HIP に関するデータを集める 2 つ方法がある。①自分たちが良いと考える既存の調査を選んでその自分たちの入れたい項目、たとえば、HIP の調査項目を入れて使う。②HIP の定義と調査項目を作って他校を誘って共同調査をする。たとえば、20 校集まればその中で実施する。

学生に対して、HIP をやるときにはルーブリックを示しながらそこで期待されている目的や成果を事前

に十分に説明することが大切。学生がどれほど良いレポートを書いたとしても、学生の学びの成果とは結びついていない。海外体験のレポートのようなものは学生の満足度を示しているだけである。むしろ、リーディングに費やした時間、宿題にどれほど時間をかけたか、インターンシップでどのようなことをしたかといった調査項目の方が、学生の学修成果に結びついている。主観的データはあてにならない。

PBLはアクティブラーニングの一部である。アクティブで協同作業を伴うものだから。ジョージ・クーズの定義によれば、HIPはコラボティブ、アサインメント、プロジェクトで問題解決型のものである。

(インターンシップの強化のために)

インターンシップを強化するために、ルーブリックを作る必要を感じているが、これは受入側の企業や団体との協働作業になり難しいと考えている。

連携校が今は4校だが、10校になればデータシェアして評価にはいいがデータシェアが難しくなると思う。

(ワバッシュ大学)

カラマズー大学がルーブリックを使ってインターンシップを実施していると聞いている。インターンシッププログラムは継続していく事業なので、専門の担当者を大学に置くのが大切だと思う。

その他、連携拡大時のデータシェアやeポートフォリオ活用等について助言いただいた。

1. 『授業改善のためのアセスメント』

■日時：2013 年 2 月 26 日（火）13：05～15：30

■場所：関西国際大学 三木キャンパス

（関西国際大学では FD として実施・連携大学関係者も出席）

■講演者：Dr. Donald L. Rubin（ドナルド L. ルービン氏）

■概要

本取組で進めているルーブリックの開発に関する見識を深めるため、ルービン博士を招き、講演会およびワークショップを実施した。

講演の中ではルーブリックの仕組みや、注意点についての説明があった。ルーブリックは学生の評価のほか、授業における評価の観点の事前説明、授業の改善点の発見、学部・学科のプログラム評価等に活用することができる。さらに、ルーブリックの作成に学生が携わることで授業の成果が上がることの説明があった。また、ルーブリックを作成する際の注意点としては解釈に幅のない用語を使い、抽象性を排すこと、大学が設定する目標が学生レベルとプログラムレベルで関連付けられ、評価の中に含まれていることが必要であることの説明があった。

ワークショップではグループに分かれてルーブリックの観点の作成をした。評価をする教員側、評価をされる学生側での共通認識ができる表現の必要性や、評価をする際にはどのような観点が適するのかについて理解できた。

■講師略歴

Dr. Donald L. Rubin

(Professor Emeritus, Language Analysis and Health Communication, University of Georgia)

アメリカ・ジョージア大学のルービン博士は言語学を専門とする教授であり、同大学の留学プログラムの長を務めた。現在は名誉教授。保健とリスク・コミュニケーション・センターの主席科学者（Senior Scientist）を務めている。

2. Terrel Rhodes 博士による講演

『アメリカの高等教育における教養教育の展開とルーブリックを活用した評価』

■日時：2013 年 6 月 28 日（金）14:50～18:00

■場所：関西国際大学 尼崎キャンパス

（関西国際大学の研修会として実施、連携大学関係者も出席）

『ルーブリックの開発と活用の方法』

■日時：2013 年 6 月 29 日（土）9：30～12：00

■場所：ハーモニーホール※兵庫県看護協会内（公開ワークショップ）

『Liberal Education And America's Promise (LEAP) と VALUE Rubric の有効性』

■日時：2013 年 6 月 29 日（土）15：00～17：00

■場所：ハーモニーホール※兵庫県看護協会内（公開講演会）

■概要

本取組の目標として掲げている「学修成果の測定の充実」に関する見識を深めるため、アメリカのリベラル教育・教養教育の大学団体を代表する Association of American Colleges and Universities (AAC&U)

のローズ副会長を招いてワークショップおよび講演会を実施した。

（ワークショップ）

ループリックの基本構造の説明の後、次のようなワークショップを行った。参加者がループリックを用いた学生のレポートの評価を行い、その際に生じる評価のばらつきについて、それぞれの評価に至った理由を発表し、議論をした。評価者がループリックに共通の理解を持って評価をするためにこの作業（「カリブレーション」という。）が必要となる。カリブレーションでは、議論をし、意見を集約しつつ、評価を1つに収斂させた。ここでは完全な意見の一致ではなく、「大まかな合意」をすることがゴールとのことであった。

（講演会）

講演では AAC&U で実施されている取組について統計データに基づいてお話しされた。その後 VALUE プロジェクトで開発された“VALUE ループリック”について話された。ループリックの基本的な構成要素として、5つか6つの評価基準があり、VALUE ループリックは4つの水準に区分されている。最終到達レベルとして学生が学位を得て大学を卒業するときに達しているべき、あるいは達してもらいたい各学習基準の水準、入学して学びをはじめる最初の水準等を議論して決定している。また、各レベルの間隔は必ずしも同じではないとのことであった。最後にループリックの評価における信頼性や妥当性について、実際に使用をしながら検証をする作業（カリブレーション）が重要であることの説明があった。

■講師略歴

Dr. Terrel Rhodes

(Vice President, Office of Quality, Curriculum, and Assessment, AAC&U)

ローズ氏は、インディアナ大学（ブルーミントン）で学士号を取得し、ノースカロライナ大学（チャペル・ヒル）で政治学修士号および博士号を取得した。米国高等教育の分野に関わる前は、ポートランド州立大学、ノースカロライナ大学等で25年間大学での教育に従事した。現在、AAC&Uの質・カリキュラム・評価担当副会長の職にあり、学部教育の質、高等教育情報に関する収集と発信、一般教育、そして学習評価に焦点をあてた活動をしている。同氏は毎年開催される AAC&U 一般教育学会の会長も務めている。

3. 『学生支援と教育改善のためのデータ接続と組織文化』

■日時：2013年8月6日（火）10:40～16:50

■場所：関西国際大学 尼崎キャンパス

（関西国際大学ではFDとして実施・連携大学関係者も出席・遠隔配信）

■講師：Dr. Charles Blaich（チャールズ・ブライチ氏）

Ms. Kathleen Wise（キャスリーン・ワイズ氏）

■概要

本取組における教育改革の適切な推進にあたっては、学生に関する情報を収集・分析するとともに、これを改善計画に活用することが必要となるため、先進の取組を行っているワバッシュ大学センター・オブ・インクワイアリー調査所長のチャールズ・ブレイチ博士およびキャスリーン・ワイズ調査副所長を招き、学生のデータに基づく教育改善の講演およびワークショップを行った。

講演では以下の内容について説明があった。全米で49大学が参加しているセンター・オブ・インクワイアリーでは、教育の実施と学生の学びとの関係についてパネル調査を行っている。具体的には、大学での体験、経験、条件が12の学修成果にどのように影響しているかを分析している。調査結果から、学生が成長するためには4つの大きな要因が必要であることが判明している。1つ目は良い教育と有能な教員との相互作用、2つ目は授業の予習復習や教員のフィードバック、学問的に難易度の高いことに取り組むこと、3つ目は多様性との関わり、4つ目は深い学習（Deep Learning）により分析したり、統合したり、他の人と会話し、自分の考えをまとめていく高度な知的作業を伴うことである。

ワークショップでは、ある大学を想定したデータに基づく、組織的な教育改善についての議論、ハイ・

インパクト・プラクティスの検証にどのようなデータが必要となるかについての議論が行われた。

■講師略歴

Dr. Charles Blaich

(Director of Inquiries, Center of Inquiry, Wabash College)

(Director, Higher Education Data Sharing Consortium (HEDS))

ブライチ博士は、ワバッシュ大学センター・オブ・インクワイアリー調査所長兼高等教育データ共有コンソーシアム (HEDS コンソーシアム) 会長の職にある。

同氏は 1986 年にコネチカット州立大学で心理学の博士号を取得した。その後、1987 年から 1991 年までイースタン・イリノイ大学で、また、その後 2002 年までワバッシュ大学で教鞭をとった。2002 年からはセンター・オブ・インクワイアリーの現職に就き、2011 年には HEDS 会長を兼ねて現在に至っている。

Ms. Kathleen Wise

(Associate Director of Inquiries, Center of Inquiry, Wabash College)

ワイズ氏は、センター・オブ・インクワイアリーの調査副所長である。同氏は、2001 年にシカゴ州立大学で MBA を取得した。その後、2001 年から 2003 年までイーライリリー社の財政分析主任を勤め、2004 年にセンター・オブ・インクワイアリーの主任研究員となった。2007 年にセンター・オブ・インクワイアリーの現職に就き現在に至っている。

4. 『アメリカの高等教育における IR と質保証』

■日時：2014 年 9 月 24 日 (水) 13:50~17:05

■場所：関西国際大学 三木キャンパス

(関西国際大学では FD として実施・連携大学関係者も出席・遠隔配信)

■講師：Dr. Randy L. Swing (ランディ L. スウィング氏)

■概要

米国高等教育における IR と質保証に関する現状と課題について学ぶべく、スウィング博士を招き、講演会およびワークショップを実施した。

ワークショップでは大学における教育の課題についてグループで議論をした。また、高等教育により社会の問題解決ができる人材を育てていくために、複数の専門分野の課題をシェアし、広い視点で世の中の問題を解決していく教育を実施することが重要であることについてワークショップを交えながら説明された。講演では米国の複数大学が連携した学位の質に関する学生の達成基準に関する取組および低所得者層の学位取得率の向上のための取組の事例の紹介があった。

■講師略歴

Dr. Randy L. Swing

(Executive Director, Association for Institutional Research : AIR)

スウィング博士は、米国インスティテューショナル・リサーチ協会 (AIR) の専務理事を務めている。AIR は、データを使用した高等教育機関の計画、管理および運営に関する専門的な開発とサポートを 1,500 の単科大学および総合大学に属する 4,000 人のメンバーに提供。スウィング博士は米国内および国際会議で頻繁に講演し、ワークショップのリーダーをつとめ、評価、IR、学生の成功に関する書物や雑誌記事の著作も行っている。

ジョージア大学で修士号と高等教育の博士号取得。AIR に関わる前は、アパラチア州立大学で IR、学生評価を含めた機関研究に 20 年以上携わった。同大学では初年次に関する政策センターの上級研究者および共同所長としてリーダーシップを発揮した。その後、ノースカロライナ州プリバード大学にある初年次教育政策研究所所長を経て、現職に至っている。